

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：32686  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2018～2023  
課題番号：18K00388  
研究課題名（和文）第三の人種 近現代アメリカ文学における黒人エリート表象の意味とその歴史的背景  
  
研究課題名（英文）The Third Race: The Significance and Historical Context of Representations of Black Elite in Modern American Literature  
  
研究代表者  
新田 啓子 (Nitta, Keiko)  
  
立教大学・文学部・教授  
  
研究者番号：40323737  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1860年から現代までのアメリカ文学作品に描かれた「黒人エリート」像を対象とし、その表象の系譜と社会・歴史的背景を詳らかにしたものである。「黒人エリート」とは、その起源においては、奴隷の立場からいち早く解放され、私財をなして政界、学術・教育界、教会等で指導的地位を得たアフリカ系の市民層を指す。この集団を、より顕著な社会的役割を帯びた「第三の人種」と指定して、アメリカ社会の人種問題の複雑性を具体的に詳述し得た点に、本研究の独自性がある。方法面では、1) 南北戦争期、2) 再建期、3) 大移住期、4) 第二次大戦期、5) 公民権運動期、6) 現代に分け、作品分析と史料調査を並行的に進行した。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題の意義は、南北戦争と再建期の意味を、黒人エリートの存在を手がかりに再考し得た点にある。南北戦争は人種の正義を意図したものではなかったが、奴隷制度の撤廃は白人の排他性を部分的にも解体した。その恩恵に浴したのが、黒人エリートたちであったが、その特権性は、人種平等政策と相反するカラーブラインド主義等の皮肉な思潮を産んできた。だが本研究は、その桎梏の中でさえ、有益な社会ヴィジョンを提示してきた黒人市民の足跡を明確化するとともに、人種集団内部の力学、人種観念の多層性、人種関係の複雑性を客観化することで、アメリカ社会のより精緻な見方を提起した。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the depiction of the "black elite" in American literature from 1860 to the present to clarify the genealogy and socio-historical contexts of this representation. In its origin, the term "black elite" referred to a group of African descent who were among the first to be emancipated from slavery. Through their private fortunes, they ascended to leadership roles in politics, academia, education, the church, and other institutions. This research is distinctive in its exploration of the intricate racial dynamics within American society, positing the black elite as a "third race" with a significant social role. Methodologically, the study is segmented into six periods: 1) Civil War, 2) Reconstruction, 3) Great Migration, 4) World War II, 5) Civil Rights Movement, and 6) Contemporary. Analysis of literary works and archival research were conducted concurrently across these periods.

研究分野：英文学および英語圏文学関連

キーワード：アメリカ合衆国 黒人 階級 人種 ブラック・フェミニズム 混血 アメリカ文学 カラーブラインド主義

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 「黒人エリート」という概念

本研究がテーマとしてきた「黒人エリート」(black elite)とは、アメリカ合衆国におけるアフリカ系の市民層の一である。彼らは他に先んじて奴隷の立場から解放され、私財をなして政界、学術・教育界、教会等で指導的な地位を得た人々である。この市民層としての形成自体はアメリカの独立以前に遡りうる、長い歴史を有する社会集団である。独立戦争直後のニューヨークとフィラデルフィアに出現したのがその最初の例とされており、南北戦争勃発時には、全米ですでに48万人を数えた自由黒人(free blacks)の一角を占めた土地所有者が、その中心をなしていた。

### (2) 先行研究と着想にいたる経緯

この社会層を対象とした研究は、従来、合衆国では黒人史等、社会科学の分野において、中心的に進められており、特定の都市や地域を事例に、その形成の経緯と役割をあとづけてきた。これを最初に主題的に論じたのは、黒人社会学者の草分けである E. Franklin Frazier である。彼の *Black Bourgeoisie* は、1957年、合衆国で、公民権運動が活発化し、黒人の指導者が社会的な認知を得ていたさなかに出版されている。けれども Frazier は、公民権活動家や経済的富裕層とはあえて区別されたこの集団を対象とすることにより、同人種集団のエリート層のプロトタイプを、南北戦争以前に解放されるにいたった「混血特権階級」と位置づけて、黒人集団内部における階層的ダイナミクスの分析の必要性を徴づけていた。

近年、この視点は Willard B. Gatewood の *Aristocrats of Color: The Black Elite, 1880-1920* (2000) 等に引き継がれており、これが本研究に至る着想を根本的に導いた。Gatewood は、アンテベラム期に成熟を遂げた当該黒人エリートの社会的位置づけを考察し、黒人という集団内部の動態や問題性を詳らかにした。彼らは南北戦争後、再建政府に組み込まれ、社会的地位を向上させ得たみずからを、他の黒人たちから峻別し、「旧家」を標榜するなどした「第三の身分」であったと位置づけた。本研究でテーマに掲げた「第三の人種」とは、Gatewood のこの知見を手がかりとしたものである。「第三の人種」とは、私が従来進めてきた黒人文学研究でつとに注目し、問題意識を高めてきた「黒人内部の社会的動態と格差」に対する作家たちの批判意識を的確に表意しうる概念として、この先行研究に準拠しつつ設定された。

### (3) 本邦における研究状況

本研究の着想をめぐる背景は以上であるが、従前、これが主題となる研究成果は相対的にむしろ乏しく、それゆえに、本研究の意義は高いという自己評価を行っていた。しかし本課題申請後、予備研究を進めるうちに、本邦に、この問題を主題とした研究成果、『アフリカ系アメリカ人という困難 奴隷解放後の黒人知識人と「人種」』(大森一輝著、彩流社刊、2014年)があるという事実を知り得るにいたった。合衆国黒人史・社会史の分野で定評のある著者は、アメリカ初の黒人大統領と呼ばれたバラク・オバマが、人種主義がいまだ強固な状況下、平等政策を進めることを困難とした結果、人権擁護を呼びかけながら人種的平等に言及しない「カラーブラインド主義」に拠ることになった経緯から、特定の黒人エリートのケースを記述・分析している。この研究に触れたことは、その後、本研究を開始した際、計画当初では主たるテーマと考えるてはいなかった現代の黒人指導者の営為について考究し、成果をあげるきっかけとなった。

## 2. 研究の目的

### (1) 3つの課題

本研究は、1860年～公民権運動期までのアメリカ文学作品に描かれた「黒人エリート」に着目し、(1)その表象の系譜をまとめ、(2)主要テキストの史的根拠を分析し、(3)フィクションに込められた歴史的洞察力の検証を行ったものである。上述した「黒人エリート」は、アメリカ黒人文学史の全般において、それを表象した作品を見出すことのできる像だが、従来単に、階層的な偏差として捉えられてきた。これを受け、この集団をより顕著な社会的役割を帯びた「第三の人種」として説明した歴史的研究に基づいて、文学表象を読み直すことを本研究の目的に据えた。より具体的には、この作業から、黒人集団内部の力学、人種観念の多層性、人種関係の複雑性、彼らがアメリカ社会に与えた影響を、多角的に検討できた。

### (2) 問題とする時代

方法的な面においては、当初より、1)南北戦争期、2)再建期、3)大移住期、4)第二次大戦期、5)公民権運動期という時代区分を設定し、作品分析と史料調査を並行的に進めることを計画していた。しかし、2019年度末より約4年間にわたって続いた Covid-19 パンデミックで、合衆国で行う現地調査が滞ったため、研究を2年間延長した。これにより、6)公民権運動後ないしは現代という時代区分を追加して、とりわけ現代黒人エリートの役割を検証するという目的を補完することにより、当初目論んだ以上の学術成果をあげること志した。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究の手順と延長に伴う変更

以上を踏まえ、研究3年目にいたるまでは、4ヶ年の研究期間を見込みつつ、まず1860年から約100年にわたり確認される黒人エリート表象を、5つの時代区分に即して整理しながら、文献の精読・分析を主たる方法に据え、研究を推進してきた。しかし先述のように、2019年度終盤に始まったパンデミックの影響により、本来は合衆国に渡航して行う現地リサーチを中核に進めることを予定していた文献研究の内容が、途中で変更されるにいたった。研究当初は、上記5つの時代区分に基づいて、その分析結果を系譜的にデータ化しておく計画をたてていた。だがそれを、「公民権運動後ないしは現代」を追加した6期にわたるものと変え、特に第6期に関しては、文献調査のみならず社会状況を広く視野に入れ、プラクティカルに主題化し、論文執筆を重点化するとともに積極的な成果公開を行った。

#### (2) 第6期文献研究の概要

具体的には、1年目に第1期（南北戦争期）と2期（再建期）、2年目に最も作品数の多い第3期（大移住期）、3年目には第4期（第二次大戦期）と5期（公民権運動期）に、それぞれ刊行された作品と、その歴史的背景の分析を行ったが、4年目から6年目までは、5期とともに、6期（公民権運動後ないしは現代）に広くまたがる社会的に有意なテーマを個別的に設置して、手に入る文献調査をもとにして、国内において論文成果をまとめていった。2020年6月以降は、折しもパンデミックを背景として、同年5月に合衆国で生じた警官による黒人市民の殺害事件が勃発した。それを機に、全世界に拡大した社会運動、ブラック・ライブズ・マターへの関心が高まったため、学術的・社会的なニーズに合わせて成果公開を集中して行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 「第三の人種」の意味

人種表象を主題とする本研究がこの集団に注目したのは、これが合衆国とその南部における人種構造の理解を刷新することのできる、いわば忘れられたパラメーターであるからだ。再建期（1865-77）に対する近年の評価は、人種的平等を目論んでいたはずの北部の失態を指摘するものが主流であるが、黒人エリートの存在は、その不完全さの一因ともなっていた。戦後の南部再統合と国家再建を目指した北部が推進を迫られたのは、夥しい解放奴隷の経済的自立に基づく復興であったが、その計画は頓挫した。旧奴隷たちへの補償として計画された所謂「40 エーカーにラバ1頭」は立ち消えとなり、結局のところ南部は北部の投機家に食い荒らされて停滞し、占領は単に懲罰的な征服に終わった（Edmund Wilson, 1962）。

しかしその失敗の背景にあるものは、「南」対「北」や「人種主義」対「自由主義」、または「白人」対「黒人」の図式に収まる二元的な構図ではない。「第三の身分」たる黒人エリートがこの関係に介在し、事態を複雑化させたのである。彼らが抱いた特権者としての自己認識は、むしろ戦後の南部社会を「三人種体制」として再編した。つまり、白人と黒人どちらの範疇にも適合しないこの集団は、かたや北部の共和党には新時代の大義を担った「黒人」として優遇され、州政府や議会の中枢に組み込まれて貴族化した。だが、かたや彼らはそうなった以上、もはや旧奴隷たる黒人の代表者ではあり得なかった。黒人一般に対しては、むしろ白人性を得た異人種としての地位を帯びるにいたったのだ。

ちなみに共和党政権は、旧南部支配者層への見せしめもあり、「黒人」を公職へ積極的に登用したが、この急進主義への反感が、民主党復帰後のジムクロウ社会でのリンチ横行の主因となったという説もある（Robert Penn Warren, 1961）。この見解があぶり出すのは、黒人と黒人エリートを実質的に分断する人種的利益の相反状態にほかならない。再建期以降の黒人作家には、奇しくもこのような家の出身者が散見されるが、Charles Chesnut, James Weldon Johnson, Jean Toomer (Pinchback 家) などは特に、第三の人種とも呼べる自伝的な人物像に、自我の苦悩を託していた。このような背景から、黒人エリートの史実態の解明は、アメリカの人種関係の構成をより正しく理解するため不可欠な、基礎研究と位置づけられる。

私が（一般的な）黒人エリートの重要性に気づいたのは、小説中の黒人像を通してであるが、アンテベラム期の終盤から再建期を経て大移住期（文学的にはハーレム・ルネサンス期）に登場した黒人作家、ならびにそれ以後の William Faulkner をはじめとする（白人）南部作家たちは、時に作家の歴史認識の表徴として、時に社会関係の変化を表すツールとして、黒人エリートと呼べる像を描いてきた。それら人物のエリート性は、家系、経済、性格、身体性など多様な要因に基づいている。ただしそうした像にはしばしば、上流という言葉では表しきれない性質がある。本研究では、黒人エリートの問題が単に階層の問題ではなく、より特殊な人種意識に基づいている可能性が見えてきた。その一つが、むしろ「黒人」として括られることを不本意とし、自己表現や自己達成において、人種的出自をさほどの不利益と感じずに済んできたエリート層特有のカラーブラインド主義やカラリズムである。この傾向への批判に関しては、1930-60年代に活躍した黒人女性作家・知識人 Zora Neale Hurston がいまでもリアリティをもっている。近年ではこのような偏差がなぜ生じるのかということ、インターセクショナリティという理論的概念によって説き明かそうとする社会/文学批評の一角があるが、その概念の解説を踏まえた複数の論考を、多数の読者をもつ媒体に招請寄稿することができた。

## (2) 各論

### エリート意識と混血性

マイアミ大学アメリカ高等研究所、フロリダ歴史協会、ニューオーリンズ歴史協会において行った、南北戦争以前における解放奴隷植民化計画、ならびに戦後における Freedmen's Bureau のアーカイブ調査を通じた黒人エリート像の分析、さらにそれらを扱った文学作品の分析から、「第三の人種」意識の核となるのは混血性であることが確認された。作家としては Harriet Beecher Stowe, Charles Chesnut, Albion Tourgée, Jean Toomer, William Faulkner, Nella Larsen, George Schuyler 等、人種横断的に分布する多くの優れた作家たちが、その問題を多角的に扱っている。問題の特異性を最も鮮烈に表しているテキストは、奴隷ではあったものの、その特殊な境遇から一種のエリート意識をもって体験記を刊行した女性逃亡奴隷 Harriet Jacobs の履歴である。

### ハーレム・ルネサンスの多様性

黒人芸文最初の隆盛期をカヴァする「第3期文献研究」では、アメリカ黒人の大移住期からハーレム・ルネサンス期におよぶ資料を調査した。W. E. B. Du Bois, James Weldon Johnson, Jean Toomer, Zora Neale Hurston らを中心に、明示的に社会層となって定着しはじめた黒人エリート自身の言葉や足跡が明らかとなるにいたったが、Johnson と Toomer に関しては、政治との関係を主として調べた。Johnson については、黒人人権団体 NAACP の事務局長としての、また Theodore Roosevelt 政権の外交官としてのキャリアにおいて蓄積された言説から、帝国主義や人種解放に関する思想を明らかにした。Toomer に関しては、高明な政治家である祖父 P.B.S. Pinchback への心情を綴った未刊行の自伝草稿から、「黒人エリート」像に対して彼が暗に表現していた自己認識の複雑な諸相が明らかとなった。Hurston に関しては、フロリダ等で収集したアーカイブ資料とともに、長らく未刊行であった元奴隷の聞き取り調査の記録 *Barracoon* (2018) の分析により、黒人自身の特権意識というものに対する彼女の敵意の苛烈さが明らかとなった。

### 公民権運動時代の指導者と文学

1950 年以降の黒人史は、公民権運動の中で、多くの著名な指導者が産まれたことを記している。アラバマ州モントゴメリーのバス・ボイコット運動で頭角を現した Martin Luther King, Jr. やノースカロライナ州グリーンズボロ発の座り込み運動を主導した大学生、また Malcolm X やブラック・パンサーの指導者等、イスラーム教信仰とつながる団体が、実力行使を含む社会的不服従運動を繰り広げた。それらの意義が認知されている一方で、この時代、社会的リーダーシップを考究した黒人作家は、そうした社会活動の先端とやや距離を置いていた。ここに同時代の文学における黒人エリート表象の最大の特徴がある。その代表的な作家たちは Ralph Ellison と James Baldwin であるが、両者ともに、政治的行動における集団性の欺瞞を直視し、それをおのれの文筆の基盤としていたと思われる。

### ブラック・ライヴズ・マターと女性

21 世紀転換期以降の人種のエリートは、当初本研究が主眼としていた特権性に基づいた集団から様変わりしている。その再編成は、1970 年代中盤に形成された「ブラック・フェミニズム」と呼ばれる思潮を受け継いだ女性たちの活躍によって担われてきた。黒人女性の影響については、それが社会的に確認された当初より、等閑視されることが多かった。しかし、資本主義の跳梁によって経済格差が拡大し、社会的公正性が瓦解している現状に加え、差別意識が人間同士の紐帯を切断し、特定者の尊厳を毀損する事象の世界的な頻発が、当該思想のリヴィヴァルを必然化し、また Ella Baker など多くの女性指導者たちの再評価を促進している。殊にブラック・ライヴズ・マター (BLM) 運動の知的・政治的動力源は、ブラック・フェミニズムと見なされており、インターセクショナルリティなる概念も、もとは 1970 年代の黒人女性思想からきている。この点の意味を、より大きな視点で説明する際、黒人エリートという枠組みの有効性は多大である。

### 関連理論と派生的成果

本課題は、人種集団内部の力学、人種観念の多層性、人種関係の複雑性の考究の途上に、以上の中心的な主題には入らない、さまざまな派生的研究成果を産むにいたった。研究の過程においては、それらを一概に排除せず、より広範な作家や作品を介した理論的研究として遂行した。その主要なもの、Henry James における恥辱論、William Faulkner における歴史論、Ernest Hemingway における法理念論、Edith Wharton における人種論、Carson McCullers における暴力論、また理論家 Judith Butler の身体論の人種理論からの考察等、それぞれについて論文や口頭発表の形で成果公開を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 727
2. 論文標題 「フェミニズムの耳 2 MeToo文学ことはじめ」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『みすず』	6. 最初と最後の頁 31-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 726
2. 論文標題 「フェミニズムの耳 1 連帯のリアリズムのために」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『みすず』	6. 最初と最後の頁 41-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 55-7
2. 論文標題 「What's This Madness in My Mind? 女性ラップが引き寄せるもの」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『ユリイカ』	6. 最初と最後の頁 62-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 1180
2. 論文標題 「ジュディス・バトラー『問題 = 物質となる身体』 Still Crazy After Thirty Years」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『思想』	6. 最初と最後の頁 133-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 77-7
2. 論文標題 「命のやすさ 依存者の詩学と不確かな生」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『群像』	6. 最初と最後の頁 145-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 50-5
2. 論文標題 「この生から問う ラディカリズムとしての交差性」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『現代思想』	6. 最初と最後の頁 35-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 第50巻1号
2. 論文標題 「サイディア・ハートマン『わきまえない女たち、美しい実験』」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『現代思想』	6. 最初と最後の頁 132-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 第48巻第13号
2. 論文標題 「未踏のホームへ ブラック・ライヴズ・マターとフェミニズム」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『現代思想』	6. 最初と最後の頁 48-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 -
2. 論文標題 「BLMの版図、あるいは警察予算の撤回をめぐる」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『別冊 ele-king ブラック・パワーに捧ぐ』	6. 最初と最後の頁 68-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 第51巻第8号
2. 論文標題 「人種がきこえる 実録なりすまし烈伝・コロラド編」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ユリイカ』	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 第51巻第16号
2. 論文標題 「Fearless Morrison Critique 恐れなきモリソン論への一考察」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ユリイカ』	6. 最初と最後の頁 54-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 第1151号
2. 論文標題 「依存者の詩学、あるいは耐え忍ぶ者の透視図」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『思想』	6. 最初と最後の頁 148-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 第50巻第11号
2. 論文標題 「喪失なき成熟 ダックワースのポストファミリーと刷新される母の領域」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『ユリイカ』	6. 最初と最後の頁 57-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nitta, Keiko	4. 巻 40
2. 論文標題 “Lessons in Difference in the American Feminist Criticism of the 1980s.”	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Ex-position	6. 最初と最後の頁 267-284
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.6153/EXP.201812_(40).0007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 新田啓子	4. 巻 第47巻第3号
2. 論文標題 「追悼の前提 いかにかに殺しに抗するのか」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『現代思想』	6. 最初と最後の頁 166-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件(うち招待講演 7件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 新田啓子、岡野八代、三牧聖子
2. 発表標題 「いま、わたしたちが『ケアの倫理』を読むことの意味を探る」
3. 学会等名 同志社大学フェミニスト・ジェンダー・セクシュアリティ研究センターシンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2024年



1. 発表者名 新田啓子
2. 発表標題 「サハラ、あるいはインフェルノ James Baldwinの性と生殖」
3. 学会等名 日本英文学会第94回全国大会シンポジウム第7部門（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 新田啓子
2. 発表標題 「アメリカ文学と不確かな黒人」
3. 学会等名 九州アメリカ文学会第66回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 新田啓子
2. 発表標題 「『私は3回ニグロになった』 Zora Neale Hurstonと信用の地平」
3. 学会等名 日本英文学会関東支部第17回全国大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新田啓子
2. 発表標題 「ヘミングウェイの『遵法』精神」
3. 学会等名 日本ヘミングウェイ協会第30回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Keiko NITTA
2. 発表標題 "A Voyage Across the Multicultural Atlantic: Edith Wharton 's Double Consciousness"
3. 学会等名 The International Conference on Transnational American Studies: Trans-Pacific, Trans-Atlantic, Trans-Chronological. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新田啓子
2. 発表標題 「ブラック・アトランティックへの船出 Edith Whartonの二重意識」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 ブリット・ベネット著、友廣純訳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 早川書房	5. 総ページ数 480
3. 書名 『ひとりの双子』(新田啓子「解説 乱反射する片割れたち」pp. 471-478.)	

1. 著者名 竹村和子著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 430
3. 書名 『愛について』(新田啓子「解説 すべてが途切れなく」pp. 391-417.)	

1. 著者名 巽 孝之監修、下河辺美知子、越智博美、後藤和彦、原田範行編著、新田啓子、舌津智之、古井義昭、圓月勝博、水野尚之、渡邊克昭、小川公代、阿部公彦、諏訪部浩一、渡邊真理子、池末陽子、遠藤不比人、大河内昌、中井亜佐子、黒崎政男、他30名分担執筆	4. 発行年 2021年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 554
3. 書名 『脱領域・脱構築・脱半球』（新田啓子「ブラック・アトランティックへの船出 第一次世界大戦とイーディス・ウォートン」pp. 212-231.）	

1. 著者名 キエセ・レイモン著、山田 文訳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 里山社	5. 総ページ数 336
3. 書名 『ヘヴィ あるアメリカ人の回想録』（新田啓子「『母たちの庭』を推敲すること」pp. 322-331.）	

1. 著者名 パトリース・カーン=カラーズ著、アーシャ・バンデリ著、ワゴナー理恵子訳、新田啓子解説	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 336
3. 書名 『ブラック・ライヴズ・マター回想録』（新田啓子「解説 パトリースのブルース」pp. 319-333.）	

1. 著者名 下河辺美知子、高瀬祐子、日比野啓、舌津智之、巽孝之編著、新田啓子、佐久間みかよ、大串尚代、権田建二、伊藤詔子、板垣真任分担執筆	4. 発行年 2019年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 344
3. 書名 『アメリカン・マインドの音声 文学・外傷・身体』（新田啓子「恥、あるいは人格の臨界 ヘンリー・ジェームズの知の体質について」pp. 75-102.）	

1. 著者名 諏訪部 浩一編著、日本ウィリアム・フォークナー協会編、新田啓子、小林久美子、後藤和彦、阿部公彦、大地真介、竹内理矢、笹田直人、金澤哲、クリストファー・リーガー、重迫和美、藤平育子、花岡秀、田中敬子、千石英世、中野学而分担執筆	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松柏社	5. 総ページ数 448
3. 書名 『フォークナーと日本文学』（新田啓子「『歴史離れ』の方途 森鷗外とフォークナー」pp. 22-47.）	

1. 著者名 三原芳秋、渡邊英理、鷗戸聡編著、新田啓子、郷原佳以、橋本智弘、井沼香保里、磯部理美、森田和磨、諸岡友真分担執筆	4. 発行年 2020年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 266
3. 書名 『クリティカル・ワード 文学理論』（新田啓子「欲望」pp. 98-123.）	

1. 著者名 花岡 秀、藤平育子、中 良子、新田啓子、千葉淳平、上西哲雄、田中久男、松岡信哉、大地真介、坂根隆広、舌津智之、後藤和彦、千石英世、平石貴樹分担執筆	4. 発行年 2018年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 374
3. 書名 『フォークナー文学の水脈』（新田啓子「豊饒なる現実 トゥーマー、フォークナー、肉体の南部史」pp. 71-96.）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------